

申請者: 楊 斌

論文題目 「信頼システム」としての日本企業
－ その生成、構造、機能と変貌 －

審査員 村田和彦
小松 章
西口敏宏

1. 本論文は、かつては高い業績を示した日本企業が、何故に現在長期不況に苦しみ、そこから脱出できないのかという問題意識を起点として、戦後から今日にいたるまでの日本企業の行動メカニズムを、一貫して説明することのできる理論を、「信頼システム」として日本企業を把握することによって構築するとともに、これに依拠して、長期不況の原因の解明と日本企業が長期不況から脱出するためにとりうる方途をも、模索しようとしたものである。
2. 本論文の評価できる点は、次の3点である。
 - i. 第1点は、筆者が設定した研究課題を克服するために必要な分析枠組みを、人間の欲求充足活動としての「交換(取引)活動」を中枢概念として、自ら構築していることである。しかも、この作業は、多数の重要文献を精力的に渉猟し、批判的に検討し、撰取することに基づいて行われている。「交換」を鍵概念として、把握するとともに、①交換(取引)主体と対象が限定されているか否かによって、交換を四つの態様(封建型、ルール型、信頼型、ネットワーク型)に区分し、②交換(取引)対象が経済的欲求に関わるのか、社会的欲求に関わるのか、両方に関わるのかによって、取引システムを市場、社会、および企業に区分し、③しかもこの三者の相互のあり方の相違によって、社会経済システムに違いが生まれてくるという分析枠組みは、企業行動・社会経済システムの国際比較のみならず、一つの国におけるそれらの歴史的進化の分析にも利用可能なものである。
 - ii. 第2点は、筆者自身が構築した分析枠組みを実際に用いて、戦後から今日にいたるまでの日本企業の行動メカニズムを分析して、①日本企業の行動は、「内部成員の信頼型交換に基づく組織コミットメントを原動力とする企業の内部革新と外部環境改造による『信頼システム』としての自己組織化努力」として特徴づけられる、②日本企業の長期不況の原因は、「信頼システム」としての日本企業の自己組織化の行き過ぎとそれによる市場と社会の機能劣化に求められる、とする結論を導出していることである。しかもこれらの筆者の結論の根拠づけは、再び筆者が精力的に渉猟した多数の研究成果を動員する形で行われている。筆者が自己の構想にしたがって自己の主張を、既存の研究成果を縦横に活用して根拠づける能力は、特記に値するものがある。
 - iii. 第3点は、日本企業のこれまでの行動メカニズムの分析に基づいて、筆者が、日本企業が長期不況から脱出するための方途に関して、その鍵は、「信頼システム」としての日本企業の肥大化が引き起こした市場と社会の機能劣化に抗して、日本企業の活動領域の自己限定と市場と社会の機能復権、ネットワーク型交換の創発のうち求められるという主張を、既存の研究成果を存分に動員する形で行っていることである。
3. 本論文の問題点としては、次の3点が指摘されねばならない。
 - i. 筆者は、社会システム論(ルーマン)に依拠して分析枠組みを構築しているのであるが、社会システムとその境界(環境)の把握の仕方に関して、いまだ不徹底な部分が存在している。
 - ii. 筆者は、歴史的・進化論的アプローチ、特に歴史的経路への依存性を強調しているのであるが、歴史的事実に基づく理論の展開に欠ける部分もないわけではない。
 - iii. 筆者は、自己の構想に基づいて自己の主張を根拠づけることに専心するあまり、概念の規定、学説の理解、分析、推論において自分にとって有益な側面のみを取り上げ、これを強調しすぎるために、他の側面へに対する考察に欠けるところも、ままた見られる。
4. 以上のような問題点が存在しているが、本論文は筆者が自立して研究活動を行っていくために不可欠な問題設定能力、分析枠組みの構築能力、問題分析能力・推論能力、体系化能力そして何よりも広い視野を持っていることを十分に示している。よって審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が、一橋大学学位規則第4条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。